



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

71

國家圖書館出版社



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館
編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

71

國家圖書館出版社

第七一冊目錄

昭和十七年（一九四二）旅行日誌（第三十九期生）

藤森正歲	第十六班		一
齋藤増雄	第十六班		二九
長坂毅	第十六班		五七
小林淑人	第十七班		九五
北出太良	第十七班		一三一
野上正	第十七班		一七五
瀬戸真夫	第十七班		二〇五
加藤通夫	第十八班		二四一
大村弘	第十八班		二七七
内田元三	第十八班		三〇七
櫻田治平	第十九班		三三三

碓水純男	第十九班	三五五
信元安貞	第十九班	三七三
渡邊卓郎	第二十班	三九九
岡秀彥	第二十班	四三三
太田松男	第二十一班	四六三
東輝夫	第二十一班	四七九
蜷木定輝	第二十一班	四九七
宮島英三	第二十一班	五一五
鈴木良介	第二十二班	五二一
大森史郎	第二十二班	五六三

昭和十七年度

大旅行日誌

第十六班

藤森正歲

大旅行調査日誌

市十市班

藤森正威

六月五日

愈々川をである。身が一段と引緊まる。先輩の汗と血

とを以て築いたこの責を、史の後継者として今日その旅

空をするのだ。威厳胸に迫る。幾度か送った赤門に今

日は送られる身として立つてゐる。光陰似築。

風吹く。人々と雄々しい歌をうたう。

しみ。と後輩の合唱するのと聞いつてゐると今迄とは異

つたこの歌の味が身にしみる。

萬雷の如き拍子に送られて停留所に向ふ。昔ならは、い

や一、二斗前迄は自動車と連ねて頭等と立寄りたのである。

が、時だ！時代の波とすまじい勢を以て吾等には
 迫り来る些の容赦も許さない。大旅行も然りだ。昔の旅
 行に比すれば現代は確かに大旅行の名に値しない。
 然し時代の変遷環境の変化と共に大旅行は変つて来たの
 であり変らざるを得なかったものである。現代は現代の
 大旅行の意義がより形式がある。時代と外れた超ノ史
 的の議論批判は凡そ成立しない。
 鉄道沿線の旅行とは云へ治安未だ完からざる地への旅
 びあるから。宣父ル際し死への覚悟が一応要請される。
 その行程深刻なものではないとしても。

人間は時々刻々死への危険に直面している。たゞ平常に
 於ては、それと自覺しないまじのことだ。だから一度死
 に直面すれば、狼狽し見憎い有様と呈する。多くの人間は
 どうしてあゝまで人生の表面のみと泳いでゐるのか。そ
 れで一生を送り得るものは、悩まなくてよいかも知れぬが、そ
 れでは禽獣と何等違ふ所がないではないか。キェルケゴール
 がいみじくも云へる如く、人間とは死への存在である。
 幸なる哉!! 戦争は我等に死と自覺せしめ、稀烈なる反
 省と喚起し、事態と正視するに堪えぬものは、それは享
 樂にふける日を送り、自暴自棄の生活と送けるのだ。

然し一度は戦争によつて死への覺悟を促され豁然とし
 て自己の生活に反省の斧を揮はんとするものか、如何にし
 て死すべきか、日々是好日の境地に達すべきか、苦悩する
 に違ひない。そこには信仰の生れ哲學が生れる。
 現実を正視することは何人と恐しく難しい。ここか。お
 母の目と目前に控え我等は陷りなく死して生る道を
 おもて悩み続ける所らう。瞬間的生に死して悠久なる
 史の中に生きたい。戦争が我等にこの解決と迫つてくる。
 現代の學生の氣持は少くともこの迄到達している。解脫
 への道は荊の道である。死ねお我に生きよ大我に

船は空る	しばしば	午後救命具の練習がある。	二、にも死か待つてゐる。	六月六日	午後青島着	二回目にかやほう美しい	海かなんとも	云へば一日中でも眺めてゐたい	存は氣がする。	山紫水	明	めいまいに所を	夜は歓迎会が開かれた。	先輩の左	席が少い。	支那の民族性を研究せよと盛に強調せられた	六月七日	郊外四方の齊詩氏を訪問。	日曜日なので会社対抗の運動会に家族で出席されて留守だったのので会場迄行きお会
------	------	--------------	--------------	------	-------	-------------	--------	----------------	---------	-----	---	---------	-------------	------	-------	----------------------	------	--------------	--

ふし、一緒に家へ戻る。午後明日青島で再会することと約
して辞去した。残りの時間で砲台を見学、宿舎悔事協
会へ歸る。

六月八日

正午事務所で斎藤氏に面会中、官舎の後同氏の案内で商工
会議所理事松崎先輩と訪問す。堂々たる体躯に一杯は自
信と漲らせ、學問に対する深き熱意と理解を見せられた。
斎藤氏の紹介で調査の豫備として中口人に店に行き
邦の事情と聞くのだが仲々通じぬ。経済邦は學術語で
るから解らなかつたらしく、山平邦上海邦と云つた所へ漸

7
 く通した。一寸しなことで踏くものだ。それより棉棧に
 案内して貰ふ。清南帮らしいが帮の結合は殆どないらしい。
 い。豫定と繰り上げ夜行で清南へ回ふ。
 六月九日
 清南よりの急行列車顛覆のため、徒歩連絡と行ふ。二時間
 程遅延した。清南は曹遊の地だから他の二人と別れて徳
 島の知人を訪ねるべく直に台発。倉田氏は禪僧になるが
 布教のためこの地に腰を据え、寺も小さいが反那家屋を修
 理して建てつゝあつた。草創則の人は涙ぐましい努力とし
 てゐる。今日付特に暑気が厳しい。

六月十日

他の二人と約束した汽車で落ち合った。丁度討伐帰り

の兵隊と一緒になる。仲々賑か。で時間と忘れる。午後三

時過ぎ天津へ着く。先輩中込氏の宅へ行く。物凄く暑そ

と黄塵で一晩中うら／＼してゐた。

六月十一日

今日は一般状況見学のたゝめ租界を廻る。その途中日本

棉花で先輩中村氏文治君代理瑛川氏より棉花の話を伺ふ

それより山田先輩に挨拶に行く。

六月十二日